

## 【書 評】

犬塚元『デイヴィッド・ヒュームの政治学』  
 東京大学出版会，2004，xii+317頁。

まず、『経済学史研究』の書評で「政治学」という書名を持つ本書を取り上げることについて若干の説明しておく必要がある。筆者は、本書でいう政治学とは「社会科学に近似する」(p.1)のものであると述べている。たしかに、後に述べるように筆者の関心はヒュームの政体分析(政治機構論)に集中しているのだが、政治思想史における通説的なヒューム像の見直しと、経済思想史の分野にも大きな影響を与えてきた「富と徳」のパラダイムに対する批判的意識との両方を持つことによって、この著作は、政治思想史と経済思想史、両分野の問題意識の共有を前提にした新たなヒューム像を提出している。

筆者のねらいを私なりに整理するならば、①社会契約説の批判者という狭いヒューム理解を超えること(従来の政治思想史におけるヒュームの位置づけを書き換えること)、②政治機構論の思想家としてヒュームを捉えること、③富と徳という二分法を乗り越えること、の三点にある。本書評では、全体の内容を網羅的に紹介するよりも、分野の違いを越えてなされた本書の貢献に焦点を当てることにしたい。

周知のように、近年の思想史研究では、方法論に対する自覚が強まってきている。とくにQ. スキナー以降の思想史研究は、言語論的アプローチを採用することで、それ以前の伝統的な思想史に見直しをせまってきた。だが、「はじめに」において筆者は、たとえば自然法学のパラダイムにせよ、「富と徳」の二元論にせよ、それらの研究視覚は、個々の思想家の理解する思想の伝統とはたして一致しているのか、という本質的な疑問を提出する。

この疑問に答えるために用意された筆者の方法論は明解である。つまり「われわれが検討対

象とする政治学者(思想家)自身の理解した政治学史(思想史)像に着目する」(p.7)というものである。これこそ、誤解と曲解の歴史であることを宿命づけられた思想史において、個別の思想家の貢献を明らかにする一つの有効な視点だと筆者はいう。この方法論は、現代の思想史研究者が整理した大きな伝統の中に個別の思想家を位置づけるアプローチからは一線を画すと同時に、個別の思想家の独自性や革新性だけに価値を見いだす従来のアプローチ(たとえば社会契約説の批判者というヒューム像もその一つである)にも批判的な立場を貫くことができる。

それでは、ヒューム自身が理解した思想の伝統とは何だったのか。また、ヒュームはいかなる伝統を受け継ぎ、それを発展させようとしたのか。筆者は、ヒュームの理解した思想の伝統を習俗論的政治学と政治機構論の政治学とに整理し、前者に対する批判と後者の継承・発展こそ、ヒュームの課題だったと主張する。

習俗論的政治学とは、本書において「徳の政治学」ともいわれているが、「政治における様々な問題の根本原因を人間の道徳的な「腐敗」に見だし、その解決策として「徳」を称揚する政治論」(p.10)であり、プラトン、トマス・モア、さらにはジョン・ブラウンなどの議論を指す。政治的問題を道徳的改善へと回収してしまうこれらの議論に対して、ヒュームは機構や制度の工夫による改善を目指す。これこそ、ヒュームがハリントンの『オシアナ』を高く評価した理由だ、と筆者はいうのである。このことは、とくに共和主義の伝統の一理解としても有意義である。この区分を用いれば、たとえばヒュームが奢侈による腐敗や衰退を訴える議論

には批判的でありながら、数々の論説で制度としての共和政を高く評価している理由も明らかになる。

とはいえ、筆者はヒュームが習俗の役割を軽視していたとは考えない。いわば、ヒュームは、習俗論的政治学を批判しつつも、習俗論を不可欠の視点として持ち続けたのである（ここで、道徳論的・習俗論的政治学と、習俗論とを区別しなければならない）。筆者が理解するヒュームの政治学とは、習俗論と機構論の二本立てである。ただし、一方が他方を規定するという決定論でも、徳から富への移行でもないことに注意する必要がある。こうして筆者は、近年のヒューム経済思想史研究が『イングランド史』の習俗論に議論を集中させてきたことをふましつつ、『イングランド史』の中心的な課題が、何よりもイングランドの国制（政治機構）論であったことを強調する。また筆者は、ヒュームの理解する習俗概念の中で、商業の精神という側面は「補助的なものにすぎない」（p. 259）ことを指摘することも忘れていない。だが、ヒュームは政治機構論の伝統を継承したとはいえ、機構の改善によって習俗レベルで起こる諸問題がすっかり改善されるとも考えていない。習俗論と機構論という二つの領域の複雑な相互作用とそれともなう国制の歴史的な変化を描き出すのが、『イングランド史』の課題であったと筆者は考えているのである。

ところで、研究者が個別の思想家を描き出す場合、年代を追って思想の発展を描くというのが定石である。もちろん、それが有意義な場合も多い。だが逆にいえば、とりあえずそういう構成をとっておけば、仮に一貫する方法論がなくても一人の思想家だけを扱うモノグラフとしての体裁をとりやすい、ということも言える。だが本書は、筆者が全体の構成について非常に自覚的であることを示している。第一部は「古代人口論」や「完全な共和国論」、第二部は『イングランド史』、第三部は『道徳・政治試論集』のいくつかの論説を主として扱っており、ヒューム思想を時系列的には扱っていない。また、『人間本性論』を主體的に扱っていないだけ

でなく、その著作にほとんど重きを置いていないのも、かなり思い切った構成である。このことは、近年の研究では自然法学の伝統として議論されてきた『人間本性論』第三編と『道徳原理研究』とにおける正義論を、筆者が自身の問題設定から見たヒュームの中では中心的な議論でないと思なしていることを示している。こうした独特な議論の仕方が、明確な方法論によって裏付けられている点はずでに見たとおりである。

したがって、筆者が自覚的にとった方法論から漏れた部分を「足りない」と批判するのは、容易ではあるが、有意義ではない。むしろ、筆者の提供してくれたヒューム像から経済思想史の研究者が受け取るメリットや、筆者から与えられたヒントの方に目を向けたい。すでにふれたように、筆者のとった方法論は学問分野や対象となる人物にかかわらず有益な視点である。とくにヒュームのように、多くの著作や書簡で互いに矛盾するようにみえる言葉を残していたり、次元の異なる議論を展開している思想家を分析する場合には、論者の側が十分に吟味された方法論をもってその思想家に挑むことがいかに重要であるかを本書は示している。この点に加えて、とくにヒューム研究に絞って、最後に次の点を強調したい。

筆者の課題は、これまで十分に分析されてこなかった政治機構論の伝統を中心に描き出すことにあり、それこそヒュームの政治学だったと主張した。それでは、ヒュームの習俗論の中で筆者のいう「商業の精神」が占めるウェイトはどの程度なのか（これはその思想家の著述に占める単純な分量に比例するものではない）、またヒュームは経済活動が生み出す作用を独自の（独立の、ではない）科学なり、学問領域として捉えているのか。これらの点こそ、筆者が経済思想史のヒューム研究者に投げかけている課題であろう。この課題に取り組むにあたって、筆者が自然法思想の伝統にふれずにヒュームの政治思想を語ることができたことは、一つのヒントを私たちに与えていると言える。つまりそれは、ヒュームの経済思想においても、自然法思

## 書 評

想の伝統は（たとえばスミスにおけるほど）大きな意味を持たないのではないか、というヒントである。本書は、すでに田中敏弘、坂本達哉両会員によるヒューム研究の単著を持つ私たちの分野に、政治思想史研究の側から投げかけられたボールにたとえることができよう。この

ボールを的確な方向に投げ返していくことによって、分野の違いを越えた、ヒュームの思想史研究という伝統の、さらなる継承と発展が今後もなされることに期待したい。

（壽里 竜：関西大学）